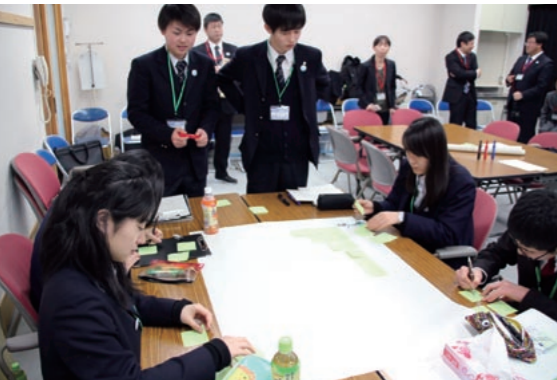




世界防災ジュニア会議では、多賀城高校の防災・減災の活動について発表した



震災から6年となる今年3月、全国12の高校と中学校を集めて開催したワークショップ



伝統的な衣装を身にまとい、生徒に歌とダンスを披露するフィリピンの研修員たち

の生徒たちが市内に残る津波の痕跡を見つければ、その高さを示すために設置してきた「津波波高標識」だ。今では、電柱や駐車場の壁など市内の約100カ所に設置され、今回のまち歩きではそのうち20カ所をめぐる。途中、津波が逆流した砂押川や、東日本大震災だけでなく平安時代の貞観地震による津波の難からも逃れたといわれる「末の松山」などを見学しながら、防災について考える約1時間のコースとなっている。

フィリピンの研修員たちを案内したのは、語学研究部に所属する生徒6人だ。大人数を相手に苦労しながらも、懸命に英語で説明していた。部長を務める佐藤千咲さんは、「なかなか思うように伝えられず反省点もありますが、貴重な経験になりました。この活動は今後も続けていくつもりです」と話す。

### 世界共通の防災対策 発信することの大切さ

防災・減災のリーダーとなる人材の育成を掲げ、多賀城高校では、2016年



### 世界とつながる 教室



歩道橋の下に貼られている「津波波高標識」について解説する宮城県多賀城高校の生徒。フィリピンの研修員は、生徒手作りのまち歩きマップ（写真左）を手に、津波の痕跡をたどった

## 歩いてたどる経験と教訓

地震や台風などの自然災害が多発するフィリピン。同国の行政官らに東日本大震災の経験や復興への過程を伝えようと、宮城県多賀城高校の生徒たちがある取り組みを行った。震災の痕跡をたどり、防災について考える1日に密着した。

### 自分たちのまちを 高校生が伝える

宮城県のほぼ中央に位置する多賀城市。東日本大震災では、180人以上が津波に巻き込まれ命を落とした。

震災後、宮城県多賀城高校では、当時の状況や復興の過程を伝えるため、同校を訪れた人々と生徒と一緒に市内をめぐる「まち歩き」を続けている。これまで、

県外の中学生や高校生、ドイツから来た高校生、オリンピック出場選手など、さまざまな人がこの「まち歩き」に参加。今年7月には、JICA青年研修事業の一環で来日したフィリピンの地方行政の防災担当者ら16人が参加した。

「震災の日には、あの位置まで津波が到達しました。案内役を務めた生徒が指差しているのは、歩道橋の下に貼られている標識。これは、震災の翌年から、同校

度に全国で2校目となる防災専門の学科「災害科学科」を新設。自然科学、科学技術、社会との関わりなど多様な切り口から防災について学ぶこの学科では、宇宙航空研究開発機構（JAXA）や、海洋研究開発機構（JAMSTEC）など、研究の第一線で活躍する外部講師による特別授業も行われている。

2015年に仙台市で開催された第3回国連防災世界会議のパブリックフォーラム「世界防災ジュニア会議」では、こうした防災・減災の活動について生徒が発表し、最高賞の金賞に輝いた。「さまざまな取り組みを通じて生徒たちの積極性が高まっていると感じます。最近では、自分たちの活動をもっと外に発信したいという思いも生まれているようです」と多賀城高校の佐々木克敬校長は話す。今年3月には、防災・減災の活動を行う全国12の高校と中学校を集めたワークショップを開催。総勢55人の生徒が、各地の震災の経験や学校での取り組みを発表し合い、「もし災害が起きる24時間前に戻れたら」という想定の下、どのような行動が取れるかについて議論した。

末の松山での集合写真。生徒たちは、末の松山が百人一首の和歌に詠まれていることも紹介した



「成功例だけでなく課題も含めて、日本が災害に対してどのように対応してきたのかを海外にも発信していきたいのです」と佐々木校長。「そして、こうした国際交流を通じて、多角的に物事を考えることができる生徒を育てていきたいと思っています」

東日本大震災の経験を世界に……。復興を支える若い力が、世界にも勇気を与えている。